

日本語を話す力をつけるための一試み (1)

奥田久子

I はじめに

広島大学の教育学部では留学生に対して日本語が教えられているが、正規の授業の他に春休みには特に初級の学生を対象に約一ヶ月の集中講義が行われている。その集中講義をとる学生のほとんどは、日本に来るまで日本人に会ったことはもちろんのこと日本語を聞くのも初めてという学生とか、数ヶ月前に日本語を習い始めたばかりで、簡単な日本語の会話にも依然不自由を感じているという学生である。初級のしかも、日本語に対してまだ非常に「若い」段階でどのような指導を受けどのような学習態度を身に付けたかということが、その後学生が日本語の力を十分に伸ばし得るかどうかということと密接なかわりあいがあるので、初級のレベルでは中級や上級以上に教える例としても「氣を使う」必要がある。

日本語の学習が単に教室内にとどまることなく、学習意欲が増大し、それが教室外にも及ぶように指導できたらよいと考える。教室での授業時間には限りがあるが、日本語が話されている日本にいるという利点をフルに活用できたとしたら、日本語の力を伸ばす上でも、日本での生活をより豊かなものにする上でも、学生が得るものには、計り知れないものがある。

このことに関連して日本語の力はゼロから出発したある学生の例

をひいてみよう。道ばたでばったり会った時などでも、この学生は母国語が英語であったにもかかわらず、徹底して日本語を使っていた。やさしそうな言いまわしに言い換えても用件がなかなかその学生に通じないので授業ではないのだし英語なら一言で通じるのにと、ついこちらが根負けをして英語でしゃべってしまったことがあったが、その学生はそれでも日本語で応答してきた。片言の日本語であっても常に日本語で話し、日本語や日本文化について学ぼうとする姿勢にはとても感心させられた。日本にいた期間は一年間だけであったが、日本語の力の伸びは目を見はるものがあった。しかし、学生の中には一步授業を離れると英語がその学生にとってたとえ外国語であったとしてもすぐ英語に頼ってしまう学生もいて、授業で日本語を理解している割には日本語の力が思うように伸びないケースも多くある。

そこで今年度の春の集中講義では授業以外の場でも日本語を話すこととする学生の自発性とか積極性にただ期待しているのではなく、「聞く、話す、読む、書く」の四つの技能を伸ばすという目標の外に、そうした力をつける過程でどこでも積極的に日本語を話す習慣とか態度を身に付けることはできないものかと考えた。そうした、授業以外の場でも日本語を話す習慣や態度を身に付けるために、い

ろいろな学習活動を試みたので、本稿ではそれらの中から、いくつか紹介し検討していきたいと思う。

II 「他己紹介」

十六名の受講者の日本語の学習歴は今回初めて日本語を習い始めた学生から昨年の十月から習っている学生まであわせ、およそ五つのレベルに分かれる。アラビア語、スペイン語、ベンガル語、インドネシア語、タイ語、中国語、英語などの母国語や文化的な背景などの違いも考えに入れると、このクラスは単一民族の学生で構成されている日本における他の外国語の授業とは違って、非常に多種多様な人々によって構成されたクラスと言える。その多様性が学生にとって不利になるのではなく、有利に働くようにするにはどうしたらよいかを考え集中講義の第一日目には「他己紹介」という学習活動を試みた。これは自己紹介をもじったもので、まず二人一組となり隣りの人の名前、出身地、専門など、なんでもよいから日本語で聞き出して記憶しておきクラス全員に自分の相手のことを紹介するものである。その時の模様を録音し、文字化したものの中から情報収集の段階で比較のとどこおりなく会話が交されていた組と、相手を理解するために非常に苦労していた組の様子を次に紹介する。

情報収集の会話（昭和五十六年三月三日（火））

パタマ「どこから来ましたか。」アリフィン「バン格拉デッシュ。バン格拉デッシュから来ました。」パタマ「ブラジル人？」アリフィン「結構です。」パタマ「仕事がなんですか。仕事。」アリフィン「仕事、仕事、専門」パタマ「専門、

専門なんですか。」アリフィン「専門、専門、はい、専門は土木です。」パタマ「土木？」アリフィン「civil engineer」パタマ「あどどぼく？」アリフィン「土木、はい、そうですね。英語で civil engineering」パタマ「工学部で勉強していますか。工学部」アリフィン「工学部じゃない。」パタマ「工学部は Faculty of Engineering」アリフィン「はい。これ私の国の大学で勉強しました。」パタマ「バン格拉デッシュであなたは先生ですか。」アリフィン「いいえ、違います。私は consulting engineer です。」パタマ「ああ、会社で働きました。」パタマ「はあ、結構です。」アリフィン「ああ、おはようございます。」パタマ「おはようございます。」アリフィン「あなたの名前はなんですか。」パタマ「私はパタマです。」アリフィン「パタマさん。」パタマ「はい、パタマ。」アリフィン「どこから来ました。」アリフィン「いつ行きましたか。」パタマ「ああ、十月、十月、先年、先年十月。」アリフィン「そうですね。」パタマ「ここ、ここで、に、五ヶ月。」アリフィン「五ヶ月？（広島島？）」パタマ「はい、住んでいます。」アリフィン「住んでいます？前に、どこへ住んでいましたか。」パタマ「前に、タイで、住んでいます、した。」アリフィン「あなたの専門はなんですか。」パタマ「私の専門は英語教育です。」アリフィン「あなたは、あなたの国で先生ですか。」パタマ「はい、英語の先生です。」アリフィン「今どこへ住んでいますか。」

すか。」パタマ「今、東雲で住んでいます。東雲、知っていますか。」アリフィン「知らない。」パタマ「あー、マズダ会社、の……」アリフィン「ああそうですね。東洋工業会社の、近いね。」パタマ「はい、はい、あなたは今、どこで住んでいますか。」アリフィン「私は今、アジア文化会館で住んでいます。」パタマ「ああ、ターニーさん知っていますか。」アリフィン「いいえ、あなたはバン格拉デシュで見物しますか。」パタマ「ああ駄目です。」

上の会話の二人の内のパタマさんは日本へ来て約五ヶ月になるが、その間の学習期間中一度も遅刻はもとより、欠席することもなく宿題も積極的にたくさんこなし、授業の要点を把握するのも非常に早かった。英語教育が専門で本国で先生であったところから、これから文字を習わなければならないアリフィンさんを助けてもらうため、二人に隣り合わせになってもらう。アリフィンさんは、日本語に接し始めてからわずか二ヶ月にしかならないが、彼の母国語のベンガル語の文法が日本語と似かよっていることも手伝って、上達が早い。次の会話を交している内の一人、ターニーさんは昨年の十月から日本語を学習している。ASANAグループに属し、教室の内外で最も積極的に日本語を話そうと努力している学生の一人で上達が早い。その積極性をもって楊さんの隣りに座ってもらう。日本語の授業を受けるのは初めての楊さんは、日本に来て四ヶ月になるが、ことばの発音が非常に苦勞であり、しかも二人に通じる言語がないためターニーさんが楊さんの発音を理解しようと何回も聞き返している様

子が伺える。いよいよ意味が通じない時は教師の助けを求める。

楊「ここはチュクブツのヤクブツ」ターニー「チュクブツのヤクブツ?〔笑〕教師「植物、植物、シヨク」楊「シヨクブツ」ターニー「食べ物?」楊「タバモノ、シヨクブツ、ヤクブツ?」教師「薬物」ターニー「シヨクブツのヤクブツ?」楊「シヨク、シヨク、シヨクブツ、シヨクブツのカカク……シヨクブツのカカク勉強します。」ターニー「カカク?」教師「価格?」楊「カカク」教師「あつ化学?化学。」ターニー「えー、いつ帰りますか。どのくらい日本……」楊「一年ぐらい。」ターニー「一年?」楊「そう。」ターニー「来年?」楊「来年の三カツ」ターニー「三月?同じ私も三月、三月、に帰ります。そう、今、どこに、住んでいますか。」楊「住んでいません。」ターニー「家。あなたのいえは広島に……」楊「広島のことです。」ターニー「どこですか。」楊「ミラミ」ターニー「南?南の……南区……」楊「ミクの、わからん」ターニー「わからない?わたしは、えー、アジア文化会館です。広島駅。」楊「おお、駅裏、あつ裏。」ターニー「駅裏住んでいます。」楊「一年間?」ターニー「全部、一年半、一年半。」楊「一年半、ククニ、でも、ベンチャン、ベンキャン……」ターニー「勉強」楊「ありますか。」ターニー「前?」楊「あー前。」ターニー「いいえ、ここで、だけ。」楊「はあ、ここから……」ターニー「日本、日本で、日本に?日本で勉強します。今

五ヶ月ぐらいです。あなたは？」楊「ない。」ターニー「中国。」「楊「ない。はじめて。」ターニー「ああそうですか。むずかしいですか？」楊「むずかしいですね。」ターニー「いいえ、あなたの、字は同じですね。中国の字。」楊「中国の漢字は、あーわかります。しかし、漢字を…、あー」とば、ことばは、話す、あつ話すは、話すはむずかしいです。」ターニー「そうですね。」ターニー「ああああ。」楊「中国の話しと日本語の話しは、ね。」ターニー「そう。あなたは南中国から？」

二人ずつの会話を打ち切るよう全員に指示したため、上記の二人の会話はここで中断されている。

この活動のねらいは、(1)これから一緒に学習していく仲間の名前などを知り緊張感を解きほぐすこと、(2)日本語を習い始めた時期が皆まちまちなのだから、日本語の力に差があっても当然なのだということが気付いてもらい、できないことへの羞恥心や劣等感をのぞくこと、(3)その結果、間違ってもよいから積極的に日本語で何でも言える打ち解けた雰囲気を作ること、(4)日本語で相手のことについて聞き出す時の苦勞に比べて、情報を日本語で他人に伝達し得た時の喜びを味わってもらうこと、(5)進んでいる者とそうでない者が、一緒にグループ活動をやる中で、お互いに高めあう姿勢を身につけてもらうことなどである。

この学習活動を行なうに当たって教師として気を付けたことは、これはグループの編成の仕方についてであるが、朝十時半に初めて

一同が揃い、あいさつをしたり、雑談をしたり、簡単な自己紹介の作文を書いてもらっている間に、学生のだいたいのレベル、それぞれの母国語、その日初めて顔を合わせた人とそうでない人は誰と誰なのかなどの状況判断をいち早く的確にし、そうした予備知識をもとに「レリアさんとティートーさん、一緒に坐りましょうか。」とか「ターニーさん、ヤンさんの横に来ますか。」などとさりげなく指示しながら、相手のことをまだ知らなくて、しかも日本語の理解力の進んでいる人とそうでない人が隣り同志になるように配慮することである。そして学生同志の情報収集のための会話が始まってからは、正しい日本語を使っているかどうかということよりも、自力で情報を聞き出そうとする態度を身に付けることの方が大切なのだから、学生から助けを求められれば応じるが、それ以外の時は黙って見てまわるだけとした。この学習活動における学生の様子について少し述べる。情報収集の段階では知っている日本語をできるだけ駆使して、なんとか相手のことを聞き出そうと皆ひっしの様子で、大変にぎやかとなり、ピクニックでのおしゃべりのように楽しそうに話はずんできた。一人一人順番に自分の相手をクラスに紹介する時には、話している人に全員が耳を傾け、ユーモアにはすぐ反応して、笑いが起こったり、「タカヤナギ」と言おうとして「タカヤナジ」となってしまう、何度か言い直しても「ギ」が「ジ」になってしまっていたインドネシアの学生がついに「タカヤナギ」と正しく言えた時には、一同から大きな拍手が起こるなど、とても打ち解けた雰囲気となった。こうしてみるとこの学習活動のねらいの一つであった、表現力を抑制することのない打ち解けた雰囲気作りとか、

お互いに助けあいながら高め合う心づもりになってもらうといったことには一応成功してはいるが教室の外で他の人と会った時、自信を持って日本語で話すだけの表現力はまだ身につけていない。普段学生は、ほかの留学生とか日本人に出会った時、名前とか出身地とか専門など、自分のことについて話す機会がよくある。これは日本語の学習の面から考えてもこんなよい練習の場はないのだから、この他己紹介を出発点として、自分のことが日本語で言えたり、相手のことがたずねられるようになるようにこれに関連した学習活動をいくつか試みた。

III 自己紹介のモデル

次にその学習活動を簡単に示すが、これらは、その日に予定された学習内容に入る前に少しずつ時間をさいて行ったものである。

(主な教材として、国立国語研究所によって作成された日本語教育映画十本を使用した。)

他己紹介に関連した学習活動

三月 三日(火)	「他己紹介」
五日(木)	「自己紹介のモデル」に添った指導
九日(月)	ゲストを迎えての話し合い (応用会話)
十六日(月)	各自「自己紹介のモデル」を見習って自己紹介で言いたいことを清書して二十日

(金までに提出する宿題を課す。

二十日(金)

二十三日(月)

二十六日(木)

二十七日(金)

三十日(月)

上記の課題提出
個人懇談—提出された自己紹介の作文に目を通す。(二十六日まで)に暗記してくるように言う。
つクラスで自己紹介の練習をする。
日本人学生とのパーティの席で自己紹介をする。

まず紹介文のモデルについてであるが、授業が始まってすぐ書いてもらった自己紹介の作文と他己紹介の活動を通して学生がだいたいどのようなことを表現したかについているかがわかる。学生の作文の誤りをただ訂正しただけでは自然な日本語にならないので、学生の言いたがっていることを生かし、しかも紹介の場にふさわしい言いまわしになるように書き換え、下に掲げたような自己紹介のモデルを次の授業までに準備した。

自己紹介のモデル

自己紹介(じこしょうかい)
わたしは——(バングラデシユ、ドイツ、タイ、パキス

タン、フィリピン、インドネシア、イギリス、エジプト、中国、パナマ) から来た (あなたの名前) と申します。日本へは (今年、昨年、おとし) の一月に来ました。そして (東京、大阪) で日本語を (一、六) ケ月、勉強してから広島に来ました。

今 (アジア文化会館、皆実町、東雲) に住んでいます。(が、(光南町) へ、もうすぐひっこします。近くなるので自転車でかようつもりです。)

学校には (バス、電車、自転車) で (歩いて) 通っています。

わたしの専門は (英語教育、はっこう工学、電子工学) で (研究生、研究生、研修生、先生、会社員) です。

国には (両親、父、母) と (兄弟、姉、妹) が (一、二、三、四、五) 人います。

結婚していません。

妻と子供は国にいて、日本にいっしょに来ています。

子供は (一歳) の男の子が (一人) と (一歳) の (女、男) の子が (一人) います。

しゅみは (写真をとる、歌をうたう、本を読む、音楽)

を聞く) ことです。

日本語は (きょう年、今年) の (一) 月から (一週間) くらいずつ勉強して (すこし、かなり) 話せるようになりましたが (まだ) わからないことがたくさんありますので) よろしくお願ひ (いた) します。

五日と六日の両日に分けて、このモデルを使って、——の部分に自分のことを書き入れ文を完成させ、声に出して言えるように練習した。その過程で間違いやすい文法事項を取り上げ説明したが、その主なものは「どこどこから来た誰々」における助詞の「から」と名詞に先行する動詞の過去形、「どこどこに住んでいる」の「に」、「何々で通っている」の「で」などの助詞、「広島に行きました」と「来ました」の違い、「住んでいます、結婚しています」などにおける「動詞のている」の形などである。文法に関しては、この他にこのモデルに出てくるのと同じ用法が他の教材を学習している時に出てくるつど、例文として自己紹介のモデル文を思い出すようにした。

IV ゲストを迎えての話し合ひ

九日と十三日には授業参観に来られた日本人の学生の方々に留学生が質問をして、その訪問客はどういう人達なのか聞き出してもらった。その時の会話の一部を次に掲げるが、それまでに学習した表現をフルに使って、活発に質疑応答がなされ、続いて留学生が簡単にゲストに向かって自己紹介をした。昼食は学生会館で一緒に食べたが、学生の国のこと、日本へ来てふとんや自転車を買いに行った

時のことなどいろいろな話が出てとても楽しそうであったので、授業参観を希望する人にはいつでも来られる時に来て学生と話してもらう機会を多くもった。

石井貴子（一）さんと（昭和五十六年三月九日）

Ss : あなたのお名前は。

I : いいしいたかこです。

T : たかこさん、石井さんね。

Ss : たかこさんは、大学生ですか。

I : はい、そうです。私は大学生です。

Sb : あなたの専門は何ですか。

I : 私の専門は英語です。

Sn : うわあ！

Sg : あなたは、どこに住んでいます…いやどこに住んでいますか。

I : はい、私はあの、牛田に住んでいます。

St : あなたの家は、私の家の近くです。

I : あ、そうですか。

St : 私の家は光ヶ丘です。山の上。

I : あっそうですか。私の家は、あなたの家よりちょっと

はなれています。私の家は牛田でも牛田新町です。

St : あっそうですか。

I : でも同じ牛田ですね。

Sy : あなたは、何せいですか。

I : もう一度。

Sy : 何せいですか。

Sn : 何歳ですか。（Syが「何せい」と言ったので他の学生が「何歳」と正しい言い方を教えている。）

Sy : 何せいですか。

Sn : 何歳、何歳。

Sy : 何歳…。

I : はい私は十九歳です。もうすぐ二十歳です。

Sn : 十九歳…ほう！

I : もうすぐ二十歳になります。

T : 若いですねえ。

Sy : 若いですね。

(中略)

Sb : 女の大学生ですか。

Sn : (笑い)

I : はいそうです。もちろんです。男の大学生じゃありません。

Sn : (爆笑)

St : あなたの趣味…趣味はなんですか。

I : 私、趣味ですか。はい、あの、レコードを聴くことと、

ギターをひくことです。あ、でもまだ少ししかひけません。

Sti : 少しだけ。

I : 少しだけ。

I : 少しだけ。

I : 少しだけ。

St : 私もギター少しひきます。

I : あーそうですか。

St : 同じ、ハハハハ。

Sn : わあ (歓声)

I : うれしいです。

St : よかった。

St : 写真をとるは。

T : とることは。

St : とることは。

I : とられるのは好きですよ。とってください。

St : 今日はもっていません。

I : あー残念です。

(後略)

池田美津子 (M) さんと (昭和五十六年三月十三日 (金))

Sg : あなたが、名前は、何、何ですか。

M : いけだみつこ、といいます。

Sg : あー、もう一度。

M : いけだみつこ、といいます。

Sn : はあー。

Ss : いけだみつこ？

Sb : 書いてくださいねー。

Sg : すいません、書いてください。

M : 漢字ですか、ひらがなですか。

Ss : 漢字とひらがな。

Sg : 漢字とひらがなと。

St : お願ひします。

Sr : 漢字の…。

Sj : いけだ、はあー。

Sn : い、け、だ、み、つ、こ。

Sg : いけだ、みつでさん、どこで住んで…。

M : こ、です。

Sg : おー、やー、い、け、だ、み、つ、こ、さん。どこで住んでいますか。

M : はい、吉島に住んでいます。

Ss : 吉島は大学から遠いですか。近いですか。

M : 近いですね。

Ss : 何分ぐらいかかりますか。

M : 歩いて十五分ぐらい。自転車です十分ぐらいかかります。近いです。

Ss.j.g. : ちかい、ちかい。

(中略)

Sr : 何を、勉強していますか。

M : 今、中国語を勉強しています。

Sn : ああー。

Sr : はあ、中国語。

Sj : 何年生ですか。

M : もう卒業しました。おとし卒業しました。今は研究生です。

Sr : 研究生。

Sj : はぁー、何学部ですか。

M : 総合科学部です。

Sn : そ、う、ご、う、かがくぶ。

Sr : 中国に、行ったことがありますか。

M : いいえ、ありません。

Sr : たぶん、行きたいですね。

M : はい、行きたいです。

Sa : 中国語で話してできますか。

M : どんな話ですか。

Sa : 中国語で話せますか。

M : 少し話せます。

Sj : たとえば、例、おねがいます。

M : たとえば、何をなしましょうか。

Sa : あなたの名前は、何ですか。中国語で…。

M : では…ウォーダーミンツォーシーチー…池田美津子。

Sn : わぁー。(拍手)

Sr : このクラスでは、中国人、一人います。

M : あぁ、そうですか。

Sr : 今日は、いません。

M : さんねんです。

St : じゃうずですね。

M : そうですか。

Sr : 中国は、むつかしいですか。

M : ええ、むつかしいです。

Sr : 発音は、むつかしいですか。

M : いえ、発音は覚えましたが、そうむつかしいとは思いません。

Sr : 日本語は、むつかしいです。

St : どのくらい中国語、勉強していますか。

M : 大学で四年、勉強しました。

St : 四年前、えーっ。

Ss : 高校。

St : 高校生は、勉強していましたか。

M : いいえ、全く、やったことはありません。

Sa : あなたは英語で、話すことができますか。話しますか。

M : 少しできます。

Sr : あなたは、中国、先生、行きたいですか。

T : 中国語の先生になりたいですか。

Sr : あなたは、中国の先生、中国語の先生、なりたいたか。

M : はい、なりたいたいです。今、少し、教えています。

Sn : はぁー。

Sr : ほんと、ほんとに? 誰に?

St : どこに。

Sr : ほんと、ほんとに? 誰に?

St : どこに。

Ss : どこで。

Sr : ああ、どこで教えていますか。

M : あのー、日中友好協会というところで、中国語の教室
があります。そこで初級を教えてください。

Sr : えーっ、学生は、何歳ぐらいですか、子供の子、大人
ですか。

M : 今は三十五歳の女性の方を教えてください。

St : ひとりですか。

M : いいえ、二人。

(後略)

V 個人懇談

このようにだんだんと紹介文を理解し、なれた頃を見計って、各自、紹介文を全部清書して提出するようにという宿題を与えた。これにあらかじめ目を通しておいて個人懇談をしたが、その時、特に行ったことは、発音の個別指導と、最後の一行、「日本語はいつからどのぐらい勉強して」のつづきをそれぞれ違う文に言い換えることである。しかし、個人差が非常にあるので学生から違った表現が引き出せない時はモデルのまままでよいことにした。

VI 日本人学生との交流

この個人懇談の後、各自紹介文を暗記してきて、クラスで自己紹介の練習をしたが、集中講義の最後の三十日に留学生と、その留学生とほぼ同じ人数の日本人の学生を拙宅に招いて開いたパーティの席を本番とした。この日には自己紹介の内容を清書した紙を持って

来ずに力のある学生は即興で新しい事柄を織り込んだりしたため、皆同じことを言っているという不自然な感じはしなかった。その時の記録から一部を次に紹介するが、この自己紹介に関する活動の今後の課題は、もう少し日本語が自由になった段階でかたにはまらない自己紹介の指導を行うことである。

パーティの席での自己紹介(昭和五十六年三月三十日) (誤りは訂正せず、学生の言った通りを示す。)

Ss : みなさんこんにちは。私はタイから来たソンボンです。日本へは昨年の十二月に来ました。あの、前は私は東雲に住んでいましたがきのう本浦へ引っ越しました。近くなつたので大学へ自転車です。タイでは私は英語の先生でした。それでここに英語教育の勉強するために来ました。今、研究生です。私はまだ結婚していません。国には妹と弟が三人います。私の趣味は読書です。日本語は昨年の十月から勉強して、少し話せるようになりました。いろいろと勉強したいと思っています。頑張りますのでよろしくお願いします。

Ste : こんにちは。私はインドネシアから来たテグと申します。日本へは今年一月来ました。今、アジア文化会館に住んでいます。私の専門は電気工学で研究生です。趣味は本を読むことです。日本へは日本語は勉強、三月から。(T、ひらがなも全部三月から)。そう、どうぞよろしくお願

します。

Sy : こんにちは。私は中国から来たヤンと申します。日本へは去年の十一月に来ました。それから徳島のタイホウ薬品で三ヶ月仕事して広島に来ました。今、翠町に住んでいます。私の専門は植物化学です。今、医学薬学の化学進出にします。(T、医学部の薬学科、植物化学、植物の化学が専門です。植物から薬を作ることです。) みなさん私は多分発音は難しいです。下手です。(T、ヤンさんもやはり、日本語は三月初めて勉強したんです。) 私の趣味は写真撮ることです。国には母と兄弟がいます。私は結婚しています。妻と子供が国います。二人。子供は二人、娘います。日本へは前に、私は日本語勉強しませんでした。今、一時間ぐらい勉強しています。どうかこうにか話します。よろしくお願いします。

VII その他の学習活動

以上「他已紹介」に始まって、パーティで自己紹介をするに至るまでの一連の学習活動について述べたが、映画を教材として扱った毎回の授業でも常に日本語を話す習慣を身に付けることを意図した三月二十六日を例に取ると、この日は「どちらが好きですか」という映画を使つての授業であったが、その単元の締めくくりとしては電話を使つての応用会話を試みた。そこに到達するまでの基礎的な

学習の映画を見ている間でも文法、発音練習、漢字、シナリオの暗記ゲームの間でもいつでも日本語が頭に浮かんだら気安く口に出して言ったり、受け答えしたりして会話を「絶やさぬ」状態を保つよう心掛け、この日本語でいわゆる「おしゃべりをする」主役は学生であつて、教師がおしゃべりの主役にならないよう注意した。一般に外国語の授業では教師がしゃべり過ぎるきらいがある。この点徹底して学生に話す機会を与える方法で、アメリカで注目されている、サイレントウェイという教授法に学ぶ点が多い。

応用会話では二人ずつグループになつて、この日学習した「比較を表わす構文」を取り入れた電話の会話文をまず書いてもらひ、筆者が誤りを訂正して回り、各グループごとに少し練習してから二台の電話の間に電池をつないで話ができる実物の電話を使つてクラスにその会話を披露してもらひ、その内容が皆に分かつたかどうか、発表グループと級友の間で質疑応答してもらつた。

この電話は電電公社からもらった中古であるが、本物であつたので本当に電話をしている雰囲気が出てよかつたと思う。壁時計などの教材もそうであるが、本来の機能を果さなくなつた状態でもよいから、教材として再利用すると思ふぬ効果をあげることが出来る。

この活動の他にオーバーヘッドプロジェクトで漫画や絵を写して即興の会話をしてもらつたり、「美しい皿になりました」という映画を見た時には粘土で各自作品を作つて来てもらひ、それについて説明してもらつたり、各々の国の文化を表わすものをなにかもつて来て、それについて話し、その国のことについて質問したり答えたりするといったことなども試みた。

VIII おわりに

とかく外国語の授業では、文法の説明や、それにそつた反復や置き換え練習に重点が置かれがちであるが、機械的なドリルはよくできても、実際にはなかなかその外国語が使えるようにならないという悩みがある。例えば英語では「話せない英語教育」とさえ言われているが、日本語はそれでは困る。留学生は日本で生活をし、日本語で授業が受けられるようにならなくてはならないし、しかも非常に短期間に教育の成果を上げなくてはならないので、よりよい授業のあり方を常に積極的に研究することが急がれる。授業の過程を丹念に記録し、分析する中で成果を上げるのも一つの方法かと思われる。

集中講義が終つてから約一ヶ月後に、留学生や日本人が多数集まる会に出席する機会があつたが、その席で留学生の中には英語で自己紹介をする学生もいたが、集中講義を取つた学生に限つては、皆日本語で自己紹介をして、立食の場でも、不自由ながら日本語で一生懸命話しているのを見て非常に嬉しく感じた。留学生の中には、日本語で話したくても、まわりにいる日本人の人々が英語でしか話してくれないので日本にいながら日本語が上達しないという悩みをうたつてている学生が少なからずいる。留学生のほとんどの母国語は英語ではないのだから、お互いの英語のためにもならないと思うのだが、留学生を相手に英語を練習しようとする学生が多いように見受けられる。外国からおかげをこらむるばかりでなく、日本が外国のために何ができるかを問われている時代である。相手が片言の日本語しか話せないとわかつていて、日本語で通そうとすれば、非

常な忍耐と努力を要するが、日本のことをより深く理解してもらい、相手のことを知る相互理解の出発点となることを思えば、これは大変大切なことである。閉鎖的にならずに、誠意をもって、いつでも気安く留学生と日本語で話す心積りでいたいものだ。積極的に留学生と日本語で話してくれる人が一人でも多くふえることを希望する。

(広島修道大学助教授)

(本学非常勤講師)